

## 慧思の「衆生妙」について

大谷大学 采翠 晃

キーワード：〈末法〉〈『法華経安楽行義』〉〈慈行〉

『続高僧伝』「慧思伝」では、「仏法東流してより、幾んど六百載、惟だ斯の南岳のみ慈行帰すべし」(T50, 654a)と、慧思の実践の特徴は「慈行」にあるとする。その一方で、その具体的な事例には、皮革や繒帛を着用しなかったことを述べるのみであり、評価と事例とのバランスが適切でないように見える。現在の私たちが「慈行」という言葉から期待するのは、衆生との関係をどのように結ぶのかということである。

慧思は、『南嶽思大禪師立誓願文』の自叙伝部分で、自らの命を狙われるほどの迫害に一再ならず遭ったことを告白している。度重なる迫害によってか、慧思は一種の人間不信に陥っていたようである。

世間の所有ゆる道俗の、殷勤に講を請い供養する者、乃至強いて勧請して経を講ぜ令むる者、此等の道俗は皆な善知識に非ずして是れ皆な悪知識なるのみ。何を以ての故に。皆な是れ悪魔の所使にして、初めは即ち殷勤を仮作して好心有るに似たれども、後には即ち斗しくなりて忿怒を生ず。善悪の二は魔にして俱に好事に非ず。今従り已後応に此れを信ずべからず。所有ゆる学士も亦た復た是くの如し。皆な信ず可からず。怨が親と詐するが如し。苦なるかな苦なるかな。不可思議なるかな。諸王・刹利の処も皆な亦た復た是くの如し。択べ択べ択べ択べ。(T46, 792a-b)

ここでは、衆生は「皆な信ず可から」ざるものであって、慧思を迫害するものとして捉えられている。事実、慧思は何度かの迫害の中で命すら落としかけているのであるから、衆生に対していかに対処するかは重大問題であったはずである。

しかし、『立誓願文』と同時期に著わされたと考えられる『法華経安楽行義』では、一切衆生は皆な仏の如しと観じて世尊を敬うが如く合掌礼拝すべきであると説き(T46, 697c)、また、『妙法蓮華経』の経題を釈して「妙」とは衆生妙なるが故なり。「法」とは即ち是れ衆生法なり」(T46, 698c)という。

この『安楽行義』に示される衆生に対する態度は、『立誓願文』の人間不信ともとれるような言葉とは矛盾するように思われる。慧思が「悪人」としての衆生とそれ以外の「妙」なる衆生とを分けて考えていたとは考えがたい。むしろ、これらは慧思の一つの衆生観の異なる二つの側面であると考えることができよう。

では、これらの二つの衆生観を結びつけていたのは何だったのか。それは、「末法」という考え方であったと考えられる。